『エルマーのぼうけん』に
ふたたびであう

弥生

『エルマーのぼうけん』にふたたびであう

母が買った『エルマーのぼうけん』が大好きだった。何度となく読んでもらい物語に胸を躍らせ、字が読めるようになってからは自分で読んだ。挿絵も可愛いし、なにより表紙の裏にあるカラフルな冒険地図が、想像力をかきたてる。

本好きの私が、本を読まなかった一年間があった。二人目の娘を産んだ頃だ。二歳の長女は一日中「イヤ！イヤ！」と泣き叫び、生まれたばかりの次女は置けば泣いた。

家事はたまるいっぽうで常に時間が足りず誰かの助けが欲しかったが、夫の帰りは遅かった。核家族の子育ては、特に「育てにくい子」がいる場合、限界を軽々と超えてしまう。長女はあきらかに育てにくい子に属していた。

子どもに食べさせるのが精一杯で、自分の食事がとれなくなっていった。夜中、二人が変わりばんこに泣くので細切れ睡眠が続いた。精魂ともに尽き果て、ある朝、体が動かなくなった。

夫に訴え、心療内科を訪ねると「産後うつ」と診断された。鉛のように重い体で、這うように育児をこなした。食事は喉を通らず、一日、栄養ドリンクたった一本が飲みきれずに半分残した日もあった。言葉の通じない、恐ろしく手のかかる二人の子どもと家にこもっているので、夕方になると胸が苦しくなって、ぼろぼろ涙がこぼれた。

次女が一歳を過ぎる頃には、少しずつ正気を取り戻してきたけれど、まだまだ育児は忙しかった。活字中毒の私が、まったく活字に触れずに過ごしてきたので、禁断症状が現れはじめたのはその頃だった。

育児の合間に無意識に、その辺に転がっている電化製品の取扱説明書や、ダイレクトメールなどの文章を、飢えたようにむさぼり読んでいたのである。それでもゆっくり本を読むような時間はなく、飢えたまま数年が過ぎた。

ふたたび『エルマーのぼうけん』にであったのは、産後うつから生還後、職場復帰し、末娘を産み、産後八週で職場復帰し…というめまぐるしい日々を送っていたある日のこと。長女が「おかあさん『エルマーのぼうけん』しってる？」という。

聞くと、保育園で先生が一日一章ずつ、読んでくれるらしい。それまで『はらぺこあおむし』や『もうねんね』など超みじかい絵本しか読めずモヤモヤと不完全燃焼だった私の本好き魂が、一気に燃え上がった。

すぐに実家で『エルマー』を探し出してきて、長女と次女に読み聞かせ始めた。本にはマジックで四十二歳になる兄の名前が書いてある。もうボロボロで読んでいるとページが外れてしまったので、贅沢とも思ったが新しく買い直した。

まだ難しいと思っていた童話に、娘たちは夢中である。毎晩「よんで！」と『エルマー』を持ってくる。試しに図書館で宮沢賢治やグリムを借りてくると、面白いように食いついてくる。娘たちと一緒に読書ができる日が来ようとは。

『エルマー』のおかげで、ようやく心から育児が楽しいと思えるようになった。数年来、険悪なムードが続いていた「育児」との記念すべき仲直りである。これまでのことは水に流そう、お互い。がっちり握手して。

『エルマー』を読み聞かせていると、母に読んでもらったときのあったかい気持ちに包まれる。そしてやはり育てにくい子だった私を無我夢中で育てた母の言葉をかみしめる。夜泣きがひどい私につきあい、母は十日間眠れずふらふらになった。父に相談すると返ってきた言葉は「育児なしだなあ」と、こともあろうに駄洒落だった。育児には終始無関心だったという。
それに引き換え、すぐに私を心療内科に連れて行き、末娘の育休を買って出てくれた夫は、なんと素晴らしいことか。

人生の中で、子どもたちに本を読んであげられる貴重な時間は、何年続くのだろう。今、七歳、四歳、二歳の娘たちは、「よんで！よんで！」とうるさいほどだが、それもきっと数年のことだ。わくわくと目をかがやかせて話の続きを待つ娘たちに囲まれていると、震えるような幸福感が体の芯から湧き上がってくる。

時を超えて楽しませてくれる物語に畏敬の念を抱きつつ、孫に『エルマー』を読み聞かせる日までをも、思い描く。
幼い頃、母と行った冒険の旅に、子どもたちとともに今ふたたび出ることができた。数十年後、孫たちに連れられて、みたび冒険に出発できたらどんなに素敵だろう。すっかり年をとっていて、エルマーと一緒に冒険に出られなかった「としとったのらねこ」みたいにならないようにしなくっちゃ。
リュックには「ももいろのぼうつきキャンデー　二ダース」を忘れずに入れていこう。これがないと、どうぶつ島の川を渡れないものね。